長崎県文化財調査報告書第１２９集

中木場遺跡Ⅲ

水無１号ダム建設工事に伴う緊急発掘調査報告書――

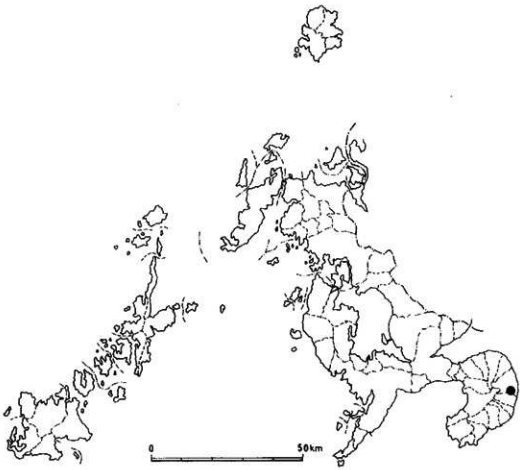
1996

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書第１２９集

中木場遺跡Ⅲ

―水無１号ダム建設工事に伴う緊急発掘調査報告書―



● 印　中木場遺跡

発刊にあたって

本書は中木場遺跡の３冊目の調査報告書です。

平成２年１１月から始まった雲仙普賢岳の噴火活動による災害の復興のために，国や県をはじめ島原市や深江町など関係諸機関は，さまざまな対策を実施してきました。特に被害の大きかった水無川流域には，建設省九州地方建設局と長崎県島原振興局により１号から４号の遊砂地とその上流に砂防ダムの建設が計画されました。

今回の調査は，水無１号ダムの建設に伴い実施されたものです。発掘により，縄文時代晩期の土器や打製石斧，中世～近世にかけての中国製陶磁器，鉄滓などバラエティーに富む遺物が出土しました。普賢岳を間近に望むこの地で長期間に渡って人々が生活したことが窺え，感慨を新たにしました。

今後，この遺跡は土砂の下に埋もれることになりますが，これまでの調査で記録保存された財産を後世に引き継ぎ，学術研究に役立てていきたいと思います。

最後に，この報告書が文化財の保護と歴史への認識を深める一助となることを念願して発刊のあいさつとします。

平成８年３月３１日

長崎県教育委員会教育長　中　川　　忠

例　　言

1．本書は，島原市天神元町・白谷町に所在する中木場遺跡の，水無1号ダムの建設工事に伴う緊急発掘調査の報告書である。

2．本調査は，建設省九州地方建設局雲仙復興工事事務所の依頼を受け，県教育庁文化課が担当した。

3．発掘調査の担当は，以下のとおりである。

長崎県教育庁文化課　埋蔵文化財班係長　藤　田　和　裕
文化財保護主事　町　田　利　幸
〃　甲斐田　彰

4．本書は古門雅高，福田一志，甲斐田彰により分担執筆され，各項の執筆者は本文目次に記した。

5．本書関係の写真撮影は，調査中のものは町田が担当し，遺物については土器が古門，石器は町田・荒木が担当した。

6．本書関係の出土遺物と図面および写真類は，長崎県教育庁文化課立山分室に保管している。

7．遊砂地の名称については，『中木場遺跡』長崎県文化財報告書第115集において「第3遊砂地」とされているが，本書では本来の名称である「3号遊砂地」を用いるものとする。

8．本書の編集は甲斐田による。

本 文 目 次

Ⅰ．調査に至る経緯……1（甲斐田）

Ⅱ．遺跡の立地と環境……2

1．地理的環境……2（甲斐田）

2．鳥原市の遺跡 ……2（甲斐田）

Ⅲ．調　　査……4

1．調査の概要……4（甲斐田）

2．土　　層……7（甲斐田）

Ⅳ．出土遺物……8

1．縄文土器……8（古　門）

2．弥生土器と土師質土器……10（古　門）

3．石　　器……14（福　田）

Ⅴ．ま と め……19（甲斐田）

挿 図 目 次

第１図　中木場遺跡工事区域図（Ｓ＝1／8,000）…… 1
第２図　中木場遺跡周辺地形図（Ｓ＝1／50,000）…… 3
第３図　中木場遺跡調査区域図（Ｓ＝1／4,000）…… 5
第４図　調査区平面実測図（Ｓ＝1／500）…… 6
第５図　第１トレンチ西壁土層図（Ｓ＝1／140）…… 7
第６図　土器実測図①（Ｓ＝1／3）…… 9
第７図　土器実測図②（Ｓ＝1／3）…… 11
第８図　土器実測図③（Ｓ＝1／3）…… 12
第９図　土器実測図④（Ｓ＝1／3）…… 12
第10図　石器実測図①（Ｓ＝2／3）…… 16
第11図　石器実測図②（Ｓ＝1／3）…… 17
第12図　石器実測図③（Ｓ＝1／3）…… 18

表 目 次

第１表　土器観察表 …… 13
第２表　石器一覧表 …… 15

図 版 目 次

図版 1　①遺跡遠景・②遺跡近景・③重機による調査風景 …… 23
図版 2　①調査風景・②土層状況・③第 1 トレンチ …… 24
図版 3　①第 2 トレンチ・②第 4 トレンチ・③第 6 トレンチ …… 25
図版 4　土器① …… 26
図版 5　土器② …… 27
図版 6　土器③・④ …… 28
図版 7　石器①・② …… 29
図版 8　石器② …… 30

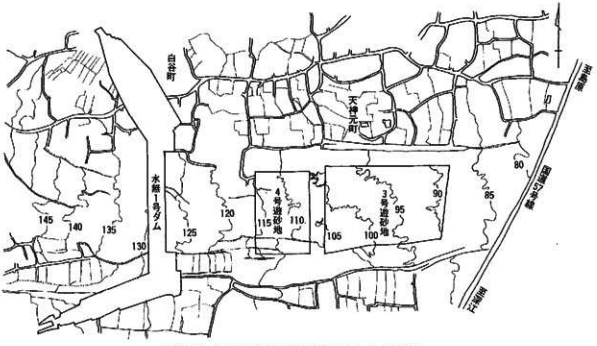
Ⅰ．調査に至る経緯

平成２(1990)年11月に始まった雲仙普賢岳の噴火活動は長期に渡り，度重なる火砕流と土石流の発生は水無川流域にも甚大な被害をもたらした。こうした被害を緩和するため，水無川流域に１号から４号の遊砂地とその上流に砂防ダムの建設が計画された。このうち３号および４号遊砂地と水無１号ダムは中木場遺跡の範囲内に位置するため調査の必要が生じた。

そこで，３号遊砂地の調査が，平成５(1993)年１月25日～１月30日の期間で工事と並行して実施された。調査の成果としては，縄文晩期を主体として，弥生・古墳および中世までの各時代の遺物が出土したが，特に縄文晩期の遺物は土器・石器があり，土器は刻目突帯文土器や黒色磨研土器など，破片ではあるがしっかりしたものが多く出土した。調査の結果は，長崎県文化財調査報告第 115集『中木場遺跡Ⅰ』に収録された。

４号遊砂地の調査は平成５年６月28日より実施する予定であったが，６月26日には国道57号線を越えるほどの大規模火砕流が発生するなど噴火活動が活発となり延期となった。その後，噴火活動の沈静化により平成７年６月より工事が再開されたのに伴い，平成７年７月17日～７月28日の期間で工事立会調査が実施された。なお，調査の結果については本年度発行の長崎県文化財調査報告集『中木場遺跡Ⅱ』に収録予定である。

４号遊砂地の調査中，雲仙復興工事事務所長より遊砂地の造成工事終了後できるだけ早く水無１号ダムの建設工事に着手したいとの要請を受けた。そこで，雲仙復興工事事務所と県文化課の協議の結果ダムの建設工事に先立ち，今回の緊急発掘調査を実施することとなった。



第１図　中木場遺跡工事区域図（Ｓ＝1／8000）

Ⅱ．遺跡の立地と環境

1．地理的環境

遺跡の所在する島原市は，島原半島東部に位置する。北は金洗川を境に有明町と接し，南は水無川を境に深江町と接する。また背後に雲仙山系を望み，その前方にある眉山の緩やかなスロープが島原湾に注ぐ。各所からは雲仙山系の地下水が湧き出すため「水の都」と称され，昭和60(1985)年環境庁より「名水百選」の指定を受けた。

中木場遺跡は，島原市の南端で水無川の北側に所在する。周囲は東下がりの緩やかな傾斜の火山性山麓扇状地である。遺跡の本体は，その北端部分に立地し，標高は90～140ｍを測る。この地は畑地や宅地，墓地として利用されていたが，普賢岳の噴火に伴い，土石流に覆われることとなった。

2．島原市の遺跡

島原市の歴史的環境については，『中木場遺跡』(1993)，『中木場遺跡Ⅱ』(1996)に掲載されているため，ここでは島原市に所在する遺跡のうち，近年発掘調査が行われた３遺跡について概観する。

(1) 礫石原遺跡（副島・町田1991）

九州地方において縄文時代晩期の標式的な遺跡として著名で，分布範囲も島原市と有明町にまたがり，約150haにおよぶ広大な遺跡である。遺物としては縄文時代晩期の土器・石器類が，第Ⅲ層に32点，第Ⅱ層に545点，表土層に500点の計1,077点が出土した。

(2) 肥賀太郎遺跡（宮崎・伴1990）

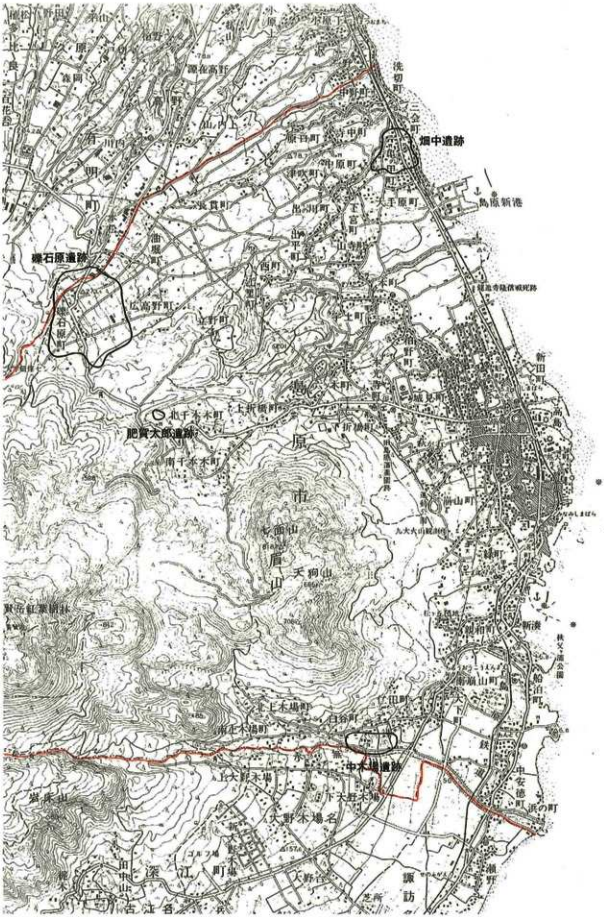
島原市北千本木町字肥賀太郎に所在し，島原半島の北東部に孤立する縄文時代晩期の遺跡群の一つで，礫石原遺跡の影響化にあったものと考えられる。遺物としては縄文時代早期の土器が４点，縄文時代晩期の土器が2,281点，古墳時代の土師器が91点，石鏃・スクレイパー・使用痕のある剥片・打製石斧・小型円盤状石器・磨石・砥石・剥片・砕片・石核などの縄文時代の石器1,300点程が出土した。

(3) 畑中遺跡（村川1994）

島原半島の東部，雲仙山系北東麓の火山性扇状台地（三会原）に位置し，東は島原湾に臨む。遺構としては，縄文時代晩期のカメ棺墓，中世期の溝，建物跡，製鉄遺構等を検出している。遺物としては，縄文時代前期と晩期・弥生時代・古墳時代・中世の土器，黒曜石製使用痕のある剥片・黒曜石製剥片・黒曜石製石核・円礫を利用したスクレイパー・サヌカイト質安山岩製スクレイパー・磨製石斧・砥石・すり石等が出土した。

〔参考文献〕

『角川日本地名大辞典４２長崎県』角川書店　1987
副島和明・町田利幸編『礫石原遺跡』長崎県文化財調査報告書第100集長崎県教育委員会　1991
宮崎貴夫・伴　耕一朗編「肥賀太郎遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅺ』長崎県文化財調査報告書第９７集　長崎県教育委員会 1990
村川逸朗編『畑中遺跡』島原市文化財報告書第９集　島原市教育委員会　1994



第２図　中木場遺跡周辺地形図（Ｓ＝1／50,000）

Ⅲ. 調　　査

1．調査の概要

調査は，平成７年10月11日～10月20日の期間とし，水無１号ダム建設予定地内の工事面積15,000㎡を対象に実施した。この地域は，平成５年１月と平成７年７月に実施された３号遊砂地と４号遊砂地の調査の際，遺物が採取できた地域の水無川上流部分にあたる。調査区は，水無１号ダム建設工事用センター杭を利用して，基本的に10m×50mのトレンチを設定し，西から第１トレンチ～第６トレンチとした。

(1) 第１トレンチ

やや西へ傾けて設定した。まず重機で１mほど掘り下げたところ，遺物の出土がみられたため人力により発掘作業を行った。トレンチ全体から遺物が出土したが，特に，北側部分には遺物集中出土区域がみられた。完掘し，全体と土層の写真撮影を行い（図版２－②・③），西壁の土層図をとった（第４図）。

(2) 第２トレンチ

まず第１トレンチの遺物集中出土区域の東側を包含層の手前まで重機で掘り下げた後，人力による発掘作業を行ったところ，遺物集中出土区域の広がりを確認することができた（第３図参照）。完掘し，写真撮影を行った（図版３－①）。

(3) 第３トレンチ

移動用の道路として必要なため発掘は行わなかった。

(4) 第４トレンチ

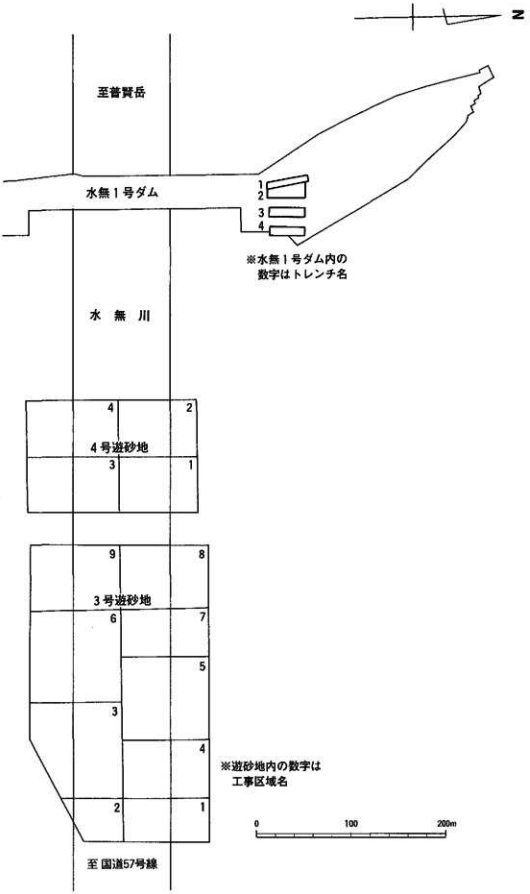
重機で掘り下げたところ，土石やコンクリート片が２mほど埋められていることが分かった。その下に第１層～第３層が確認されたが，遺物の出土はみられなかった。完掘し，写真撮影を行った（図版３－②）。

(5) 第５トレンチ

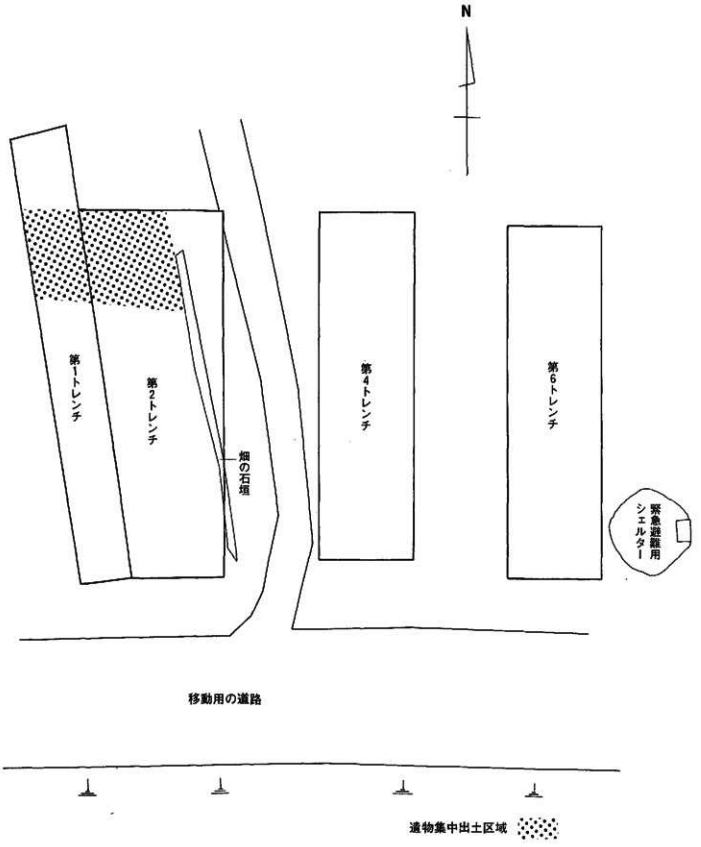
遺物の出土が期待できないため発掘は行わなかった。

(6) 第６トレンチ

重機で掘り下げたところ，第４トレンチと同じく２mほどの埋められた土石等の下に第１層～第３層が確認されたが，遺物の出土はなかった。完掘し，写真撮影を行った（図版３－③）。



第３図　中木場遺跡調査（工事）区域図（Ｓ＝1／4,000）



第4図　調査区　平面実測図（S＝1／500）

2．土　層（第4図）

土層は，状況が確認できる第1・第2トレンチにおいて基本的に6層に大別できた。

(1) 第1層

暗茶褐色の耕作土で30～40cmの堆積がみられる。場所によってはその上面に火山灰土が20～30cmほど堆積している。

(2) 第2層A

淡黄色土で火山灰質の層であり，やや粘質である。

(3) 第2層B

第2層Aと比べるとやや明るい色調をなす。

(4) 第3層A

暗茶黒色土でフカフカとした火山灰質の層である。第1・2トレンチでは鉄滓や明の染め付け片等の遺物が出土した。

(5) 第3層B

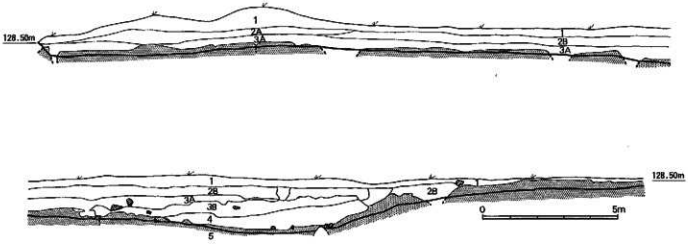
明黄色土でフカフカとした火山灰の層である。縄文時代晩期の遺物を包含している。

(6) 第4層

黒色土でやはりフカフカとした火山灰の層である。上部からは縄文時代晩期の遺物が出土した。

(7) 第5層

灰色の混礫砂層で基盤層である。



第5図　第1トレンチ西壁　土層図（S＝140）

Ⅳ．出土遺物

1．縄文土器（第5～8図，図版4～6，第1表）

第1トレンチの第3層ならびに第2トレンチの第3層・第4層から出土している。第2トレンチの第3層からは若干の弥生土器・中世土師器の出土がみられる。さらに第3層と第4層間では土器片の接合がみられた。（第6図29）

本遺跡においては，器形が復元できる資料が少なかったため，深鉢は口縁部文様帯の特徴によって形式分類し，浅鉢は口縁部の形態によって下記の形式に分類した。

深鉢A類（11・29・30・33）

口縁部に文様帯をもち，整然と数条の沈線を巡らすものである。縄文後期の三万田式土器や御領式土器の深鉢からの系譜がたどれるものである。形式が新しくなるにつれて口縁部文様帯の幅が広くなり，沈線の数が増加するといった形式変化を示す。本遺跡のものは沈線の多条化のピークにあるものであろう。

深鉢B類（2・31・34・35）

口縁部の沈線に乱れが生じるものである。深鉢A類が整然と沈線を横引きしているのに対し，横引きの沈線が曲線となったり，斜線となったり，さらに沈線を縦引きするものもある。第6図35の資料は島原市礫石原遺跡出土土器と類似したモチーフで注目される（鏡山1962・橋口1985）。

深鉢C類（3・4・5・7・8・9・10・36・37・38・41・42・44・62・64）

口縁部の文様が沈線ではなく，条痕となるもので，器面調整と装飾性の両面をもっている。沈線の増加傾向の中で，作業の省力化と効率化を求めた結果生じた技法の可能性もある。

深鉢D類（1・6・12・39・40・61）

口縁部はナデにより条痕を消すなどして，無文とするもの。

深鉢E類（32）

胴部外面でやや屈曲する粗製深鉢である。

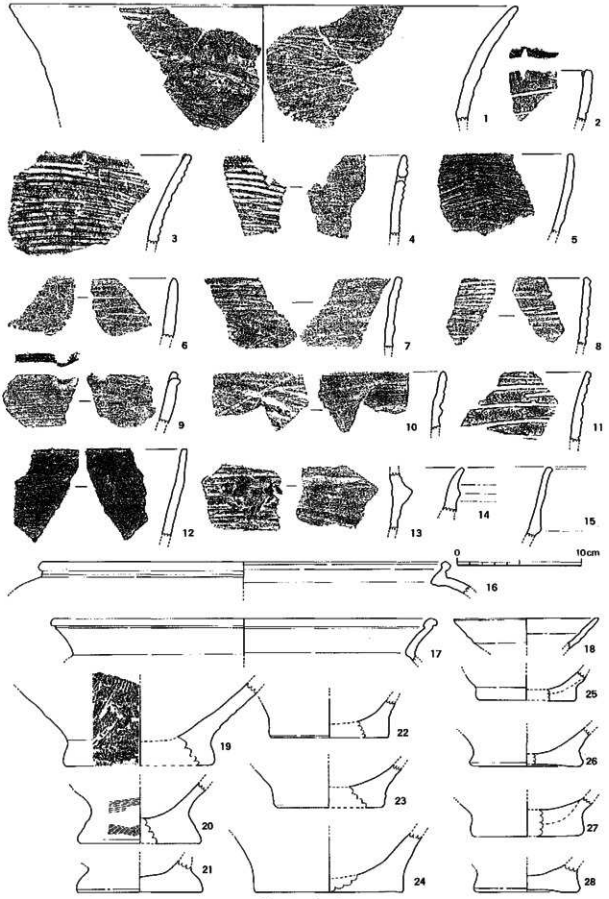
以上の深鉢のなかでA・B・C・D類は，ある時期併存するのではないかと思われる。

浅鉢A類（16・48）

精製品で口頸部が短く立ち上がり，肩部が張るものである。口縁部は玉縁状に成形される。黒川式土器の代表的浅鉢形土器とされるものである（中間1995・青崎など1993）。精緻な玉縁口縁を有する形式から，口頸部が角張って内外面の沈線が消失するという形式変化をしめす。後者の例として本遺跡では前年度報告の第9図103・108（本田・安楽・川口1994）の資料や，小浜町朝日山遺跡（安楽・町田1981）（報文では第23図5）などの資料がある。両遺跡では刻目突帯文土器と壺という新しい器種のセットが伴う。

浅鉢B類（17・47）

口頸部が長く，口縁部内外に段や沈線をもつもので，「く」字形に屈折する胴部が続くと思われるものである。三万田式土器の浅鉢や御領式土器の浅鉢の中で，口縁部に文様帯の立ち上がりを持つ形式からの系譜がたどれる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
0
10cm
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28

第5図　土器①

浅鉢C類（49・50）

口頸部が長いことは浅鉢B類と同様であるが,口縁部外面に沈線を有しないものである。

浅鉢D類（15）

精製の浅鉢で口縁は外方へのびる直口縁で，胴部が屈曲するものである。

底部

底部は底部から胴部への立ち上がりの屈曲が強いA類（19・20・21・53・54・55）と底部から胴部への立ち上がりが内に向かって屈曲しないB類（22・23・24・59・60），さらに底部から胴部への立ち上がりが底部A類とB類の中間的様相を示すC類（25・26・27・28・56・57・58）に分類できる。

その他（13・14・43・45・46・51）

13・45はリボン状突起である。46は鱗状突起であろう。43は内湾する口縁をもつ鉢形土器の精製品である。

縄文土器小結

本遺跡出土の縄文土器は普賢岳火砕流を重機で除去しながらの調査による出土資料であるため，良好な一括資料とは言いがたい。したがって，本来は型式学的分類によって時期判定をくださなければならないが，島原半島の縄文晩期土器の編年が精緻でない現状では，このような出土状況の土器群も一型式ないしは二型式ほどでくくらざるをえない。

島原半島における縄文晩期前半の土器変遷を有明町中田遺跡出土土器（晩期初頭）→島原市畑中遺跡出土土器（晩期前葉）→島原市礫石原遺跡出土土器（縄文晩期中葉）→刻目突帯文土器の段階と想定している（古門・寺田1995）。この変遷が妥当とすれば，本年度調査分の中木場遺跡出土土器は深鉢が刻目突帯文土器出現以前の形式で占められることや浅鉢A類・B類など黒川式（礫石原式）に含まれる形式は存在するが，刻目突帯文土器のセットに組み込まれる浅鉢がみられないことなどにより，大半が黒川式（礫石原式）段階（註1）に比定できる。また，前年度の3号遊砂地出土土器の一部（本田・安楽・川口1994）は刻目突帯文土器の段階の土器群とすることができる（註2）。

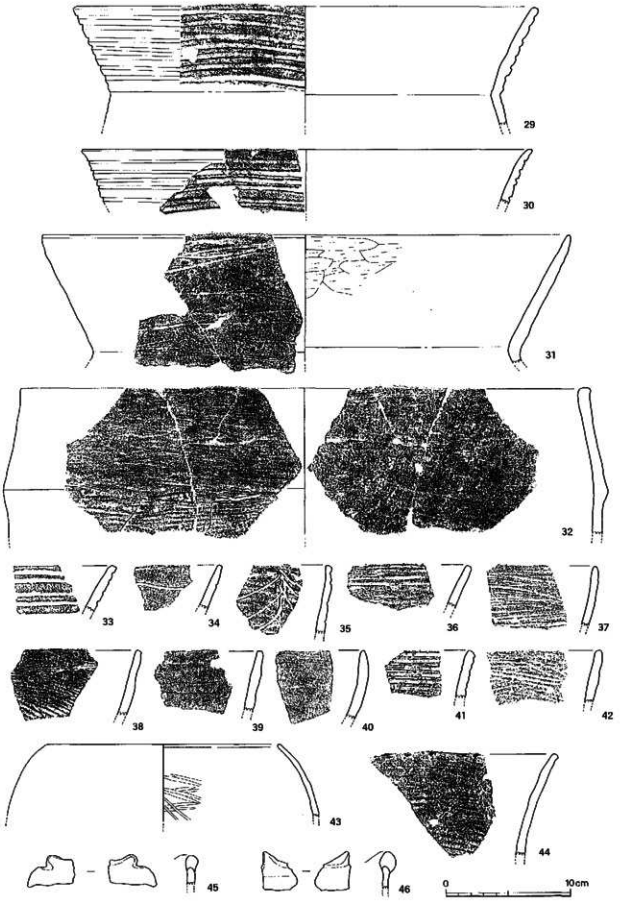
2．弥生土器と土師質土器（第7・8図，図版5，第1表）

52・65は弥生後期の甕形土器口縁部で，67は中世の土師質土器である。裏面にヘラによる記号を有する。

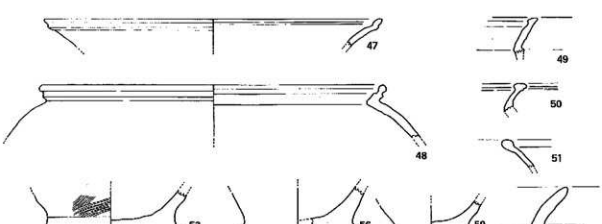
［註］

註1．礫石原遺跡出土土器については，これまで内容の検討が十分されているとはいえない。併行するとされる黒川式土器との比較検討も今後の課題といえる。したがってここでは，礫石原式土器をさまざまな検証をおこなわないまま，島原半島における黒川式土器と併行する土器群と仮定した上で使用している。したがって近年進んでいる黒川式土器の細分に対応した礫石原式土器の細分も今後の課題である。

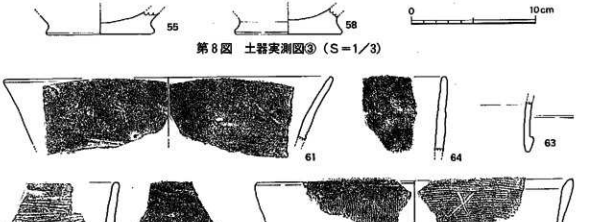
註2．3号遊砂地出土の浅鉢A類（報文の第9図99～108）は口縁部内外の沈線が消失しており，後出的である。この形式が存続していた時期のある時点で刻目突帯文土器が島原半島に出現している。



第7図　土器②（S＝1/3）



第8図　土器実測図③（S＝1／3）



第9図　土器実測図④（S＝1／3）

[引用・参考文献]

井ノ上秀文・宮田栄二・青崎和憲・熊崎明恵　1993「榎崎B遺跡」『一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅶ）』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（4）鹿児島県埋蔵文化財センター
鏡山　猛　1962「島原市隈石原遺跡」『九州考古学』14九州考古学
下山　覚　1985「黒川式土器の細分の為の基礎論」『鹿大考古』第3号　鹿児島大学法文学部考古学研究室
中間研志　1995「B　縄文晩期土器群について」『九州横断道白鳥車関係埋蔵文化財調査報告37－日木市所在柿原1縄文遺跡』福岡県教育委員会
橋口達也　1985『石崎曲り田遺跡Ⅲ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集　福岡県教育委員会
古門雅高・寺出正剛　1995『総括』『国崎遺跡Ⅱ』南串山町文化財調査報告書第3集　南串山町教育委員会
吉田正珠　1977『中田遺跡図録』百人委員会埋蔵文化財報告第8集　百人委員会
本田秀樹・安楽勉・川口洋平　1994『中木場遺跡－水無川第3号遊砂地造成工事に伴う発掘調査報告書－』長崎県文化財調査報告書第115集　長崎県教育委員会
村川逸朗・安楽　勉　1994『湖中遺跡』島原市埋蔵文化財調査報告書第9集　島原市教育委員会
山崎純男・島津義昭　1981「晩期の土器－九州の土器」『縄文文化の研究4』縄文土器Ⅱ　雄山閣

第1表　土器観察表

番号	トレンチ	層位	器種	部位	文様・成形手法・特徴	胎土	焼成	色調
01	1	Ⅲ	深鉢	口縁部	条痕(外)条痕(内)	大きな砂粒・角閃石・雲母を含む	良好	黄褐色(外)黄褐色(内)
02	1	Ⅲ	深鉢	口縁部	沈線(外)磨滅(内)口唇部刻み	砂粒多い	軟	赤褐色(外)赤褐色(内)
03	1	Ⅲ	深鉢	口縁部	条痕(外)擦過→ナデ(内)	砂粒・雲母	やや軟	暗褐色
04	1	Ⅲ	深鉢	口縁部	貝条痕(外)ヨコナデ(内)補修孔あり	角閃石	やや軟	黒褐色(外)黄褐色(内)
05	1	Ⅲ	深鉢	口縁部	擦過(外)ナデ(内)	雲母	やや軟	暗茶褐色(外)暗茶褐色(内)
06	1	Ⅲ	深鉢	口縁部	擦過(外)・条痕→研磨	砂粒・雲母	やや軟	赤褐色(外)茶褐色(内)
07	1	Ⅲ	深鉢	口縁部	条痕(外)ケズリ(内)	細砂粒・長石・角閃石・赤色砂	良好	暗褐色(外)・暗褐色(内)
08	1	Ⅲ	深鉢	口縁部	条痕(外)条痕(内)	砂粒・雲母	軟	黒褐色(外)・黄褐色(内)
09	1	Ⅲ	浅鉢	口縁部	研磨(外)擦過(内)口唇部片口状	雲母	堅緻	灰褐色(外)黄褐色(外)
10	1	Ⅲ	深鉢	口縁部	条痕→沈線状擦過(外)擦過(内)	細砂粒・角閃石・雲母	良好	黒褐色(外)黒灰色(内)
11	1	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ→沈線(外)ナデ(内)	精良	やや軟	黒褐色(外)灰黄褐色(内)
13	1	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕(外)ケズリ(内)リボン状突起	赤色砂・雲母・角閃石・砂粒	やや軟	暗茶褐色(外)暗茶褐色(内)
14	1	Ⅲ	浅鉢	口縁部	磨滅	砂粒・角閃石	軟	明黄白色(外)・明黄白色(内)
15	1	Ⅲ	精製浅鉢	口縁部	精良	良好	堅緻(外)堅緻(内)	灰褐色(内)灰褐色(外)
16	1	Ⅲ	浅鉢	口縁部	研磨(外)研磨(内)	精良	堅緻	黒褐色(外)黒褐色(内)
17	1	Ⅲ	精製浅鉢	口縁部	ナデ(外)ミガキ→ナデ・肩部ケズリ(内)	精良	堅緻	明黄褐色(外)明黄褐色(内)
18	1	Ⅲ	土師器	坏口縁部	ナデ	精良	堅緻	明黄橙色
18	1	Ⅲ		底部	条痕(外)ナデ(内)	石英・角閃石	良好	赤褐色(外)黄褐色(内)
19	1	Ⅲ		底部	擦過(外)ナデ(内)	砂粒	良好	褐色(外)灰褐色(内)
20	1	Ⅲ		底部	ナデ(外)条痕(内)	砂粒・角閃石・雲母	良好	明黄褐色(外)明黄褐色(内)
21	1	Ⅲ		底部	条痕(外)ナデ(内)	細砂粒・角閃石・石英	軟	赤褐色(外)茶褐色(内)
22	1	Ⅲ		底部	擦過(外)ナデ(内)	砂粒	やや軟	黄褐色(外)黄褐色(内)
23	1	Ⅲ		底部	ナデ(外)ナデ(内)	砂粒	軟	暗赤褐色(外)暗赤褐色(内)
24	1	Ⅲ		底部	ナデ(外)ナデ(内)	角閃石・雲母	やや軟	黄橙色(外)黄橙色(内)
25	1	Ⅲ		底部	ナデ(外)ナデ(内)	砂粒	良好	黄橙色(外)明黄褐色(内)
26	1	Ⅲ		底部	ナデ(外)ナデ(内)	砂粒	やや軟	黄橙色(外)黄褐色(内)
27	1	Ⅲ		底部	ナデ(外)ナデ(内)	角閃石・雲母・赤色	やや軟	黄橙色(外)黄橙色(内)
29	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	沈線(外)ナデ(内)	精良	良好	茶褐色(外)褐色(内)
30	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	沈線(外)ヨコナデ(内)	雲母	やや軟	黄褐色(外)明黄褐色(内)
31	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	擦過→沈線(外)ケズリ→ナデ	砂粒・角閃石	やや軟	赤褐色(外)褐色(内)
32	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	条痕(外)ケズリ(内)	砂粒・角閃石・雲母	やや軟	明黄褐色(外)・黄褐色(内)
33	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	沈線(外)ナデ(内)	角閃石・雲母	やや軟	暗茶褐色(外)暗黄褐色(内)
34	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	沈線(外)ナデ(内)	雲母	やや軟	黒褐色(外)暗褐色(内)
35	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	沈線(外)ナデ(内)	小砂粒	やや軟	明黄褐色(外)黒灰色(内)
36	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	擦過→研磨(外)ナデ(内)	砂粒・角閃石・雲母	良好	黒褐色(外)明黄褐色(内)
37	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝条痕(外)ナデ(内)	精良	やや軟	明黄褐色(外)明黄褐色(内)
38	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝条痕(外)ヨコナデ(内)	雲母	やや軟	黒褐色(外)黄褐色(内)
39	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	擦過(外)ケズリ→ナデ	砂粒・雲母・角閃石	良好	茶褐色(外)茶褐色(内)
40	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	研磨(外)ケズリ→ナデ(内)	精良		黒褐色(外)黄褐色(内)
41	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	貝条痕(外)研磨(内)	雲母	やや軟	赤褐色(外)褐色(内)
42	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	条痕(外)磨滅(内)	砂粒・雲母		明黄橙色(外)明黄橙色(内)
43	2	Ⅳ	精製浅鉢	口縁部	研磨(外)ヘラミガキ(内)	精良	堅緻	暗褐色(外)褐色(内)
44	2	Ⅳ	深鉢	口縁部	擦過・煤付着(外)擦過→ナデ(内)		やや軟	茶褐色(外)赤黄褐色(内)
45	2	Ⅳ	浅鉢	リボン状突起	ナデ(外)ナデ(外)	精良	やや軟	明黄褐色(外)明黄褐色(内)
46	2	Ⅳ	浅鉢	胴部からリボン状突起	ナデ(外)ナデ(内)	精良	やや軟	明黄褐色(外)明黄褐色(内)
47	2	Ⅳ	精製浅鉢	口縁部	研磨(外)研磨(内)	精良	良好	明黄褐色(外)黒灰色(内)
48	2	Ⅳ	精製浅鉢	口縁部	研磨(外)研磨(内)	精良	良好	茶褐色(外)茶褐色(内)
49	2	Ⅳ	浅鉢	口縁部	ナデ(外)ナデ(内)	雲母	良好	明黄褐色(外)明黄褐色(内)
50	2	Ⅳ	精製浅鉢	口縁部	研磨・沈線(外)研磨(内)	精良	堅緻	暗茶褐色(外)暗茶褐色(外)
51	2	Ⅳ	浅鉢	口縁部	ナデ(外)ナデ(内)	精良	良好	明黄褐色(外)明黄褐色(内)
52	2	Ⅳ	弥生土器甕	口縁部	磨滅(外)磨滅(内)	砂粒・角閃石	やや軟	明黄橙色(外)明黄橙色(内)
53	2	Ⅳ		底部	擦過(外)ナデ(内)	砂粒・角閃石・雲母	やや軟	橙色(外)明黄褐色(内)
54	2	Ⅳ		底部	擦過・ナデ(外)ナデ(内)	砂粒・石英・雲母	やや軟	暗黄褐色(外)赤褐色(内)
55	2	Ⅳ		底部	ヨコナデ(外)ナデ(内)	砂粒	良好	黒褐色(内)赤褐色(外)
56	2	Ⅳ		底部	磨滅(外)磨滅(内)	砂粒・雲母・角閃石	軟	黄褐色(外)褐色(内)
57	2	Ⅳ		底部	ナデ(内)	角閃石・雲母	やや軟	褐色(外)褐色(内)
58	2	Ⅳ		底部	ナデ(外)ナデ(内)	砂粒	やや軟	黄橙色(外)黄橙色(内)
59	2	Ⅳ		底部	ナデ(外)ナデ(内)	砂粒	やや軟	赤褐色(外)黒褐色(内)
60	2	Ⅳ		底部	ナデ(外)ナデ(内)	砂粒	やや軟	黄褐色(外)黄褐色(内)
61	2	Ⅲ	深鉢	口縁部	条痕(外)ナデ(内)		堅緻	黒褐色(外)赤褐色(内)
62	2	Ⅲ	深鉢	口縁部	条痕→ナデ(外)条痕(内)	砂粒	良好	黒灰褐色(外)黄褐色(内)
63	2	Ⅲ	精製浅鉢	胴部	研磨→ナデ(外)研磨(内)	精良	やや軟	明黄褐色(外)明黄褐色(内)
64	2	Ⅲ	深鉢	胴部	磨滅(外)磨滅(内)	角閃石・砂粒	やや軟	黄褐色(外)黄褐色(内)
65	2	Ⅲ	弥生土器甕	口縁部	磨滅(外)磨滅(内)	砂粒	良好	灰黄褐色(外)明黄褐色(内)
66	2	Ⅲ		底部	ナデ(外)擦過(外)	砂粒・角閃石・雲母	やや軟	明黄褐色(外)明黄褐色(内)

3．石　　器（第9～11図，図版7・8，第2表）

出土土器のほとんどが晩期の遺物であり，石器についても晩期に帰属するものと考えて差し支えないであろう。定型的な石器としては，石鏃・スクレイパー類・扁平打製石斧・石皿などがあり，一般的な晩期の石器組成を成していると言えよう。

① 剥片石器（第9図，1～9）

1～4は良質な腰岳産の黒曜石を使用したものである。1の石鏃は平基式で，緻密な剥離作業を施している。一方の面に素材の剥片の主要剥離面が看守でき，基部側に打面があったことを窺わせる。2は，剥片の両側面を加工し，剥片の末端部を尖らせて石錐としている。先端部は，磨滅しており，剥離の稜線が潰れている。素材となった剥片は，縦長の整ったものを使用しており，打面も平坦打面となっている。3～6は，スクレイパー類で，3・4が黒曜石，5・6が安山岩を使用している。4は厚みのある，やや横広の縦長剥片の中央を刃部としており，刃部は急角度の調整が成されている。表面の剥離面から，剥離した石核本体は，アトランダムな剥離をした石核と思われ，晩期に特徴的な，多面体の石核を使用したものと考えられる。素材となった剥片は，石核の調整剥片ではなかろうか。7～9は，石核を図示した。7・8は黒曜石を素材とするものである。7は，自然打面で打面は長方形を呈し，表裏面に剥離面を持つ，薄みの石核である。8は，白色の不純物を多く含んだ黒曜石を使用したもので，中九州方面の黒曜石であろうと考えられる。多面体を呈し，上部の平坦打面をメインとして剥片剥離を行っているが，裏面では，下部からの剥離を行うなど，全体的には規則性は見られない。二つの石核は，共に非常に小型のもので，先の石器類との関連については，その素材の大きさや，剥離面の観察などからは関連性が薄いように見受けられる。8にいたっては，素材の面からも，石器類に見られない素材を使用している。ただ，この石核そのものは，剥離の最終段階であり，小型化してからアトランダムに剥離したことも考えられよう。これらの石核は，いわゆる斗郎川型剥片剥離と言われるものの範疇に含まれるもので，西北九州の晩期に特有のものである。9については，安山岩の石核で，素材礫の周辺から求心的に剥片剥離を行い，横広の剥片を剥離している。5・6などのスクレイパーの表面に残された剥離面に共通する部分があり，このような石核から剥離されたものを使用したものと考えられる。

② 礫石器　（第10図，10～16）

安山岩を素材とした扁平打製石斧，磨石，砂岩製の石皿等が出土しており，狩猟用具よりも二次的な生産用具が多いことに注目したい。

扁平打製石斧は通常見られるものよりも，やや丸みを帯びた厚みのあるものが多い。ただし，礫を素材とし，その周辺加工に止まっている点で扁平打製石斧として捉えられる資料である5点中，4点が折損しており，消耗度が激しかったことが予想され，この点でも他の扁平打製石斧と共通する。

15・16は板状の硬質砂岩を加工しているもので，上下に刃部加工を施しているが，用途については不明である。製作技術的には扁平打製石斧と同様の周辺加工のものであり，あらかじめ周辺加工した長い素材を折断して石器として利用したことが考えられる。このような石器は，縄文晩期から弥生時代に見られる石庖丁形石器に共通するものがある。

③ 磨石と石皿（第10・11図，17～26）

磨石は硬質及び，軟質の安山岩を利用したものが4点出土している。いずれも分厚い円礫を使用しており，中央部がすり減った痕跡があり，中央部や側辺に敲打痕が残り，敲石との併用をおこなったことが窺われる。21～26は石皿を取り上げたが，先の磨石との関連からすればうなずけるものである。石皿の中には敲打痕を残すものもあり，堅果類の加工などにも使用されたものと考えられる。

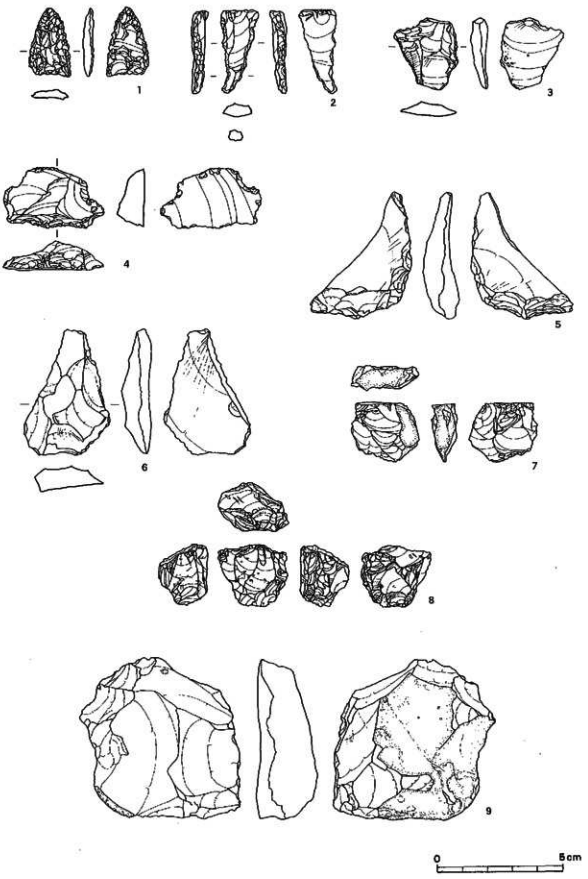
全体の遺物に対して説明を加えていったが，これらの遺物を概観してみると，一次生産用具である狩猟具の出土が少なく，石皿・磨石・スクレイパー類・扁平打製石斧などの二次生産用具の出土が多いことに気づく。この状況は先にも記載したように，縄文晩期の農耕との関連性を示唆するものと考える。もちろん農耕の定義そのものも難しいが，北部九州では，四箇遺跡A地点で焼き畑農耕がおこなわれた可能性が指摘され，そのような資料も徐々に増えつつある。本遺跡は，晩期前半を中心にするもので，なんらかの栽培農耕が定着していた可能性も考える必要があると思われる。

〔参考文献〕

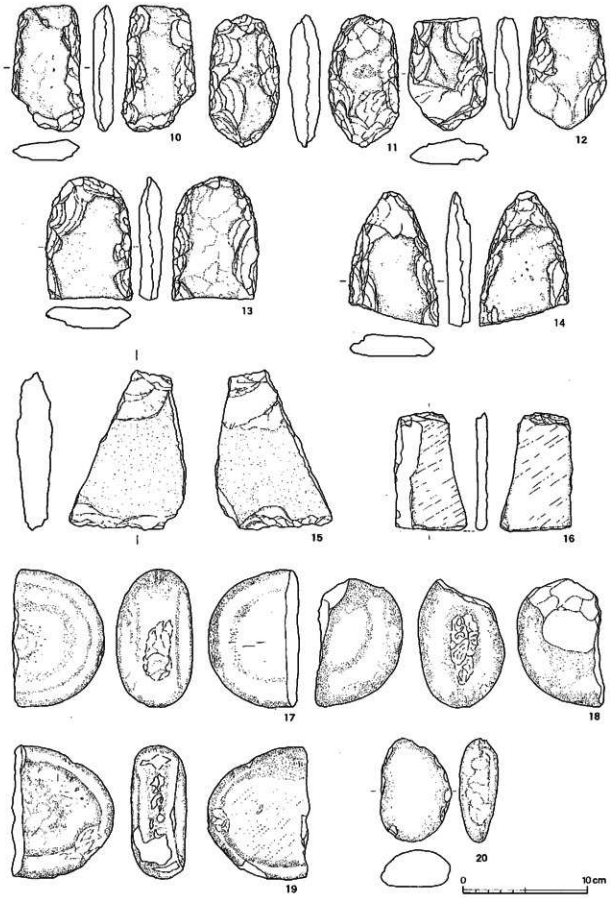
『朝日山遺跡』 小浜町文化財調査報告書第1集　小浜町教育委員会　1981
『四箇遺跡』 福岡市教育委員会　1987

図版番号	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
9－1	石鏃	黒曜石	2.7	1.7	0.3	1
9－2	石錐	〃	3.3	1.5	0.5	3
9－3	U フレ	〃	2.8	2.5	0.5	4
9－4	スクレイパー	〃	4.0	2.4	1.0	9
9－5	〃	安山岩	5.0	4.0	1.4	17
9－5	〃	〃	5.0	3.3	1.0	15
9－6	石核	黒曜石	2.3	2.7	1.1	6
9－8	〃	〃	2.5	2.8	2.0	12
9－9	〃	安山岩	6.4	6.5	2.5	101
10－10	扁平打製石斧	〃	9.9	5.5	2.0	126
10－11	〃	〃	10.5	5.4	2.5	177
10－12	〃	〃	8.8	6.2	2.1	132
10－13	〃	〃	9.7	6.9	1.8	161
10－14	〃	〃	10.6	7.1	1.9	166
10－15	石庖丁形石器	〃	12.7	9.3	2.9	420
10－16	〃	〃	9.0	5.5	0.5	69
10－17	磨石	砂岩	10.8	7.2	5.8	652
10－18	〃	〃	10.3	7.0	6.6	595
10－19	〃	〃	10.1	8.0	4.2	515
10－20	〃	〃	8.0	5.6	2.9	172
11－21	石皿	〃	24.2	14.7	4.7	2,221
11－22	〃	〃	14.9	13.6	2.5	347
11－23	〃	〃	4.0	7.5	2.5	107
11－24	〃	〃	10.1	13.8	5.3	900
11－25	〃	〃	7.0	6.1	1.2	92
11－26	〃	〃	14.0	10.8	5.5	1,345

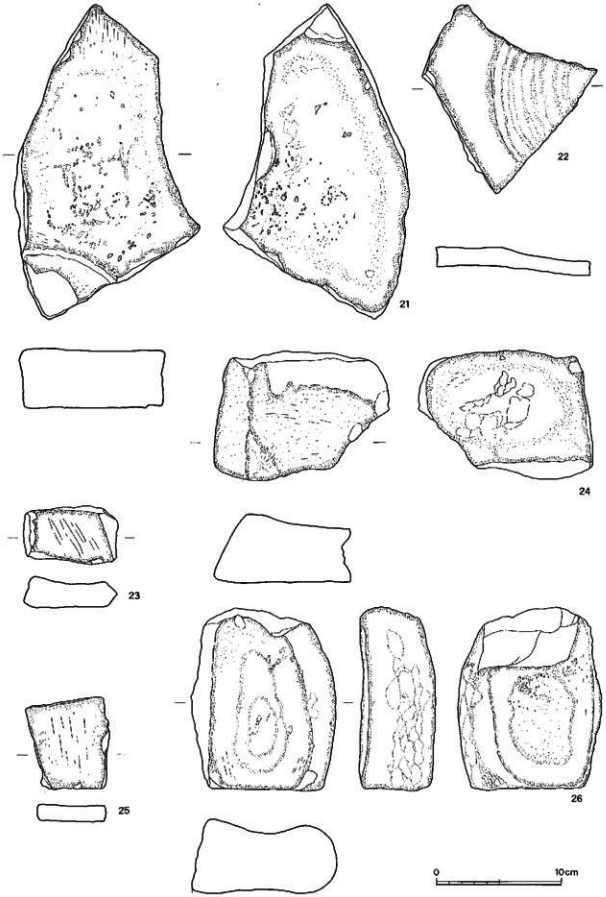
第2表　石器一覧表



第10図　石器実測図①（S＝2／3）



第11図　石器実測図②（S＝1／3）



第12図　石器実測図③（S＝1／3）

V．まとめ

今回の調査結果をまとめると以下のとおりである。

1．縄文時代晩期から近世までの遺物が出土したが，中心は縄文時代晩期のものである。

2．土器の大半は，黒川式（礫石原式）段階であった。

3．石斧や磨石等は3号遊砂地出土のものとの類似がみられる。

4．鉄滓も出土したが，関連遺構等は確認できなかった。

中木場遺跡については，平成5年から平成7年にかけて3回の調査が実施されたが，これらの調査を総括していえることは，広い地域において縄文時代晩期から近世に至る遺物が出土しており，長い時代に渡って人類が生活した痕跡があるということである。各調査区ごとにみると3号遊砂地の調査区では縄文時代晩期中葉の黒川式（礫石原式）土器のほか縄文時代晩期後葉の刻目突帯文土器，中期中葉を除く弥生時代の土器，土師器，若干の歴史時代の土器，陶磁器が出土した。標高が約10m高い4号遊砂地の調査区では，縄文土器は黒川式はみられるが刻目突帯文土器はみられず，弥生時代の土器も後期後半が中心であり，土師器はみられるが歴史時代の土器，陶磁器は3号遊砂地の調査区より少ない。さらに標高が約20m高い1号ダムの調査区では，出土土器の大半が黒川式の段階のものであった。こうしてみると，「遺跡立地の趨勢が時代を経るごとに低地へ向かう」島原半島の傾向が中木場遺跡内でもあてはまるといえよう。さらに本遺跡の特徴としては，本書で前述したが，一次生産用具である狩猟具の出土が少ないことである。例えば石鏃は，3号遊砂地の調査区で2点，4号遊砂地の調査区では0，1号ダムの調査区で1点である。短絡的にはいえないが，モミの痕跡の付いた縄文時代晩期の土器の出土した山ノ寺梶木遺跡が本遺跡から西南西4kmの位置にあることを思えば，本遺跡内での農耕の可能性も考えることができる。

緊急の災害対策ということもあり，警戒区域内の広い面積を限られた期間で行う調査であったが島原半島における標高100m前後の遺跡の特徴を明らかにするための資料を追加できたことで，一応の成果としたい。

最後になりましたが，調査に従事された作業員の皆さんをはじめ関係諸機関の方々，本書を作成するにあたって協力してくださった方々に深くお礼を申し上げます。

〔参考文献〕

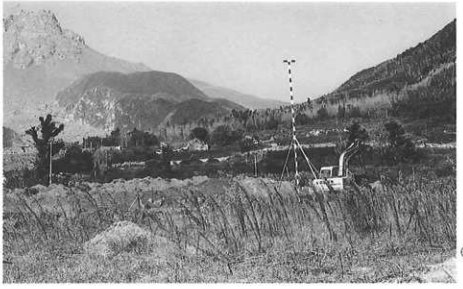
田川　肇編『国道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第116集　長崎県教育委員会　1994

本田秀樹編『中木場遺跡』　長崎県文化財調査報告書第115集　長崎県教育委員会　1994

深江町郷土誌編さん委員会『深江町郷土誌』　深江町　1971

図　　版

①遺跡遠景
（北側より）



②遺跡近景
（東側より）

③重機による調査風景

図 版 1

①調査風景

②第１トレンチ土層断面
(西壁)

③第１トレンチ

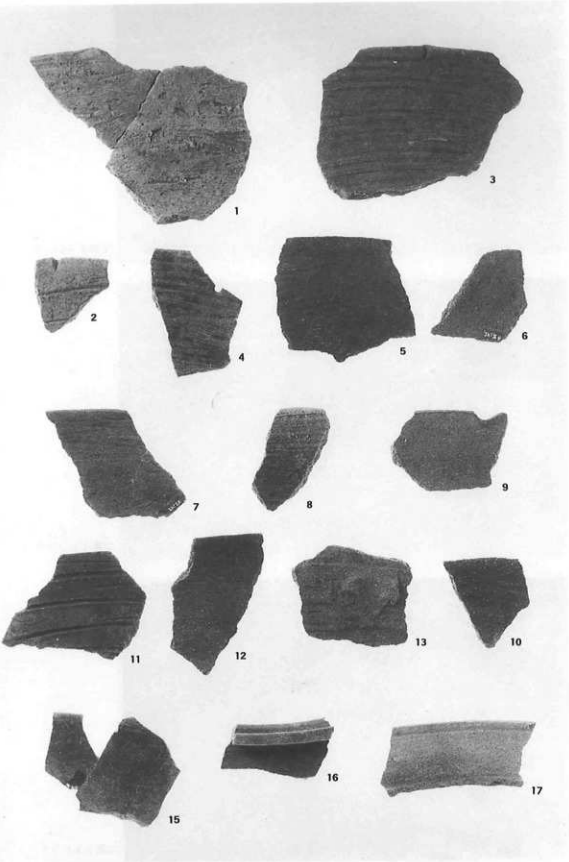
図 版 2

①第2トレンチ

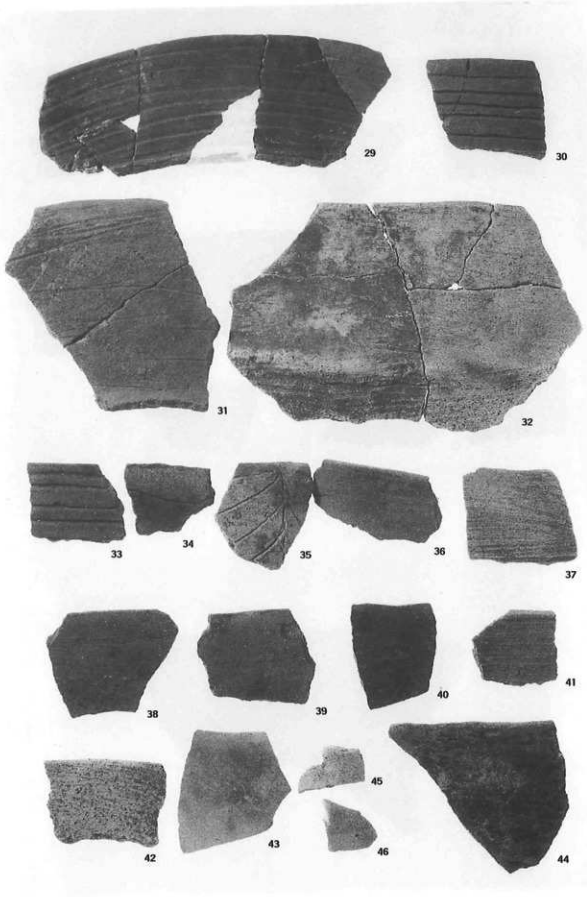
②第4トレンチ

③第6トレンチ

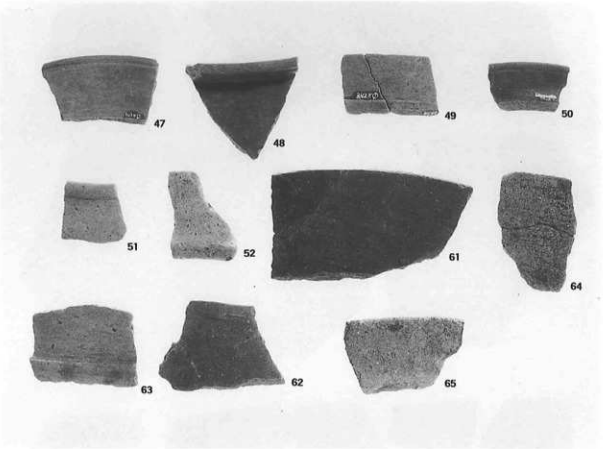
図 版 3

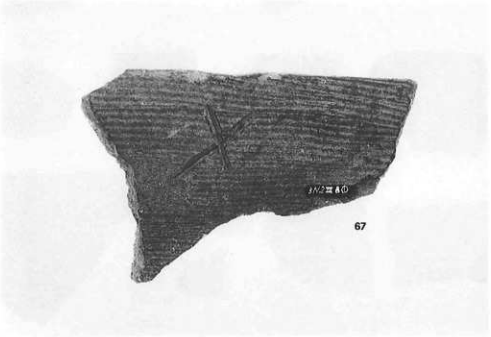


図版4　土　器　①



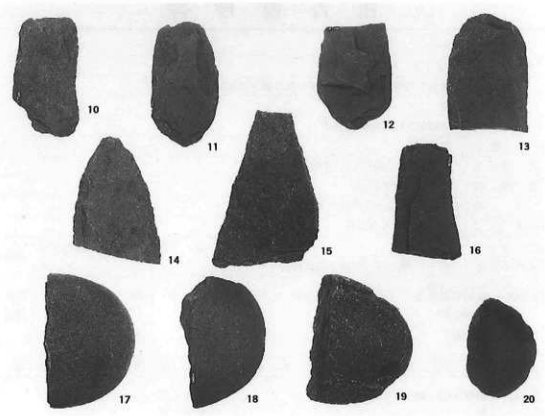
図版5　土　器　②



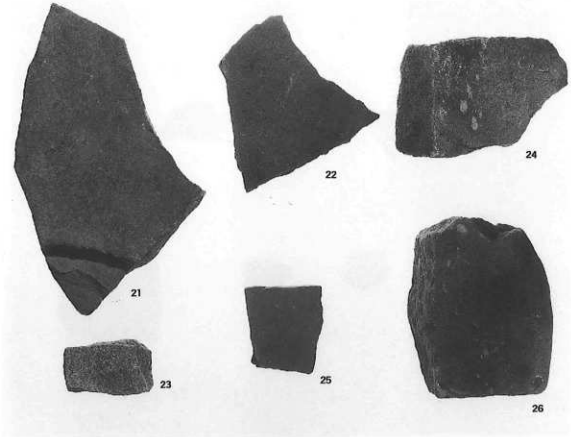


図版6　土器③・④

図版7　石器①（1／2）



図版7　石器①上段（1／2）・石器②下段（1／3）



図版8　石器③（1／3）

報告書抄録

ふりがな	なかこばいせき
書名	中木場遺跡 Ⅲ
副書名	水無1号砂防ダム建設工事に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第129集
編著者名	古門雅高、福田一志、甲斐田彰
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850　長崎市江戸町2番13号
発行年月日	西暦1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
中木場遺跡（なかこばいせき）	長崎県島原市（ながさきけんしまばらし） 天神元町（てんじんもとまち） 白谷町（しらたにまち）	42203	3－58	32° 44′ 85″	130° 21′ 10″	1995.10.11 ～ 1995.10.20	1700	砂防ダム建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中木場遺跡	遺物包含地	縄文～古墳		縄文土器 弥生土器 土師質土器 石器	

長崎県文化財調査報告書第129集

中木場遺跡Ⅲ

1996

発行　長崎県教育委員会
　　長崎市江戸町2番13号

印刷　川口印刷株式会社